

ソーシャルワーカーの実践観に関する一考察

ーテキストマイニングによる分析をもとにー

日 和 恭 世

【要 旨】

Schön (1983) によれば、専門家の専門性は知識や技術の適用ではなく、「行為の中の知 (knowing in action)」にあるという。そこで、本稿では、ソーシャルワーカーの行為の中の知であると考えられる「実践観」を明らかにすることを試みた。社会福祉士資格を有し、経験年数が5年以上であるソーシャルワーカー3名を対象としたグループインタビューを実施し、その結果をテキストマイニングを用いて分析した。

【キーワード】

ソーシャルワーカーの実践観、専門性、専門職性、反省的实践家、テキストマイニング

I. はじめに

1. 研究の背景

ソーシャルワークはしばしば分かりにくいと指摘されるが、果たしてその専門性、専門職性とは何であろうか。ソーシャルワークの専門職性を明らかにする研究は、専門職の属性¹⁾や専門職としての成熟度²⁾、また、ソーシャルワーカーの業務など様々なアプローチによって行われている。しかし、現在でもソーシャルワークの専門性や専門職性が不明確であり、ソーシャルワークを学んでいる者でさえも、その専門職像をイメージすることはなかなか難しい。では、なぜこのような状況が生じてしまうのであろうか。

日本では、秋山が比較的早い時期からソーシャルワークの専門職性に関する研究に取り組んでいる。秋山は、1971年に専門職の成立条件に関する論文をまとめており (秋山 1971)、それ以来、ソーシャルワークの専門職性に関する数々の研究を行っている。秋山の最も大きな功績は、社会福祉専門職の成立過程を明らかにするとともに、25年の間に6回の全国調査を行い、現場で働く社会福祉専門職が自らの専門職性をどのように認識しているのかを分析・考察している点である (秋山 2007)。また、秋山は、これまで専門職とは何かが明らかにされなかったのは、「専門性」「専門職性」「専門職制度」の概念が混同されてきたからであるとし、これら3つの概念を整理している³⁾。秋山と並んで日本におけるソーシャルワークの専門職性に関する研究に大きな

功績を残したのが奥田である。奥田はソーシャルワークの職務を明確化するための方法として職務分析 (job analysis)⁴⁾に着目し、その有用性の考察を行うとともに (奥田 1988)、実際に職務分析を用いて医療ソーシャルワーカーを対象とした調査研究を実施している (奥田 1989)。さらに、『社会福祉専門職性の研究』では、前述の内容に加え、ソーシャルワークの専門職業化の歴史を丁寧にたどるとともに、ソーシャルワークの技能から専門職性について考察している (奥田 1992)。秋山や奥田の研究の他にも、専門職性を自己評価するための指標作成に関する研究 (武田ら 2002)、ソーシャルワーカーの職務や業務の実態に関する研究 (日本社会福祉実践理論学会1998; 南ら 2000; 田中 2005)、専門職性の獲得に影響を与える要素に関する研究 (南 2006)、ソーシャルワーカーの専門職性の意識に関する研究 (山辺 2007)、精神保健福祉士の専門職性の要件に関する研究 (葛西 2010) など様々な研究が行われている。

このような研究は、ソーシャルワーカーがどこでどのようなことをしているのか、また、ソーシャルワーカー自身が専門職性をどのように捉えているのか等、その実態を把握することができる点で非常に意義があると考えられる。しかしながら、業務に着目した研究に関しては、ソーシャルワーカーが担っている業務をすべてソーシャルワークの専門職性として捉えてもよいのかとの疑問も残る。なぜなら、ソーシャルワークには他の対人援助専門職と共通する業務も多く、ソーシャルワーカーだけが行っているわけではないこともあるからである。そのため、ソーシャルワークの専門性や専門職性を考えようとした場合、業務の実態に着目すると、かえってその専門職性が見えづらくなってしまわないかと考えられる。

2. 研究の目的

たとえ同じ業務を行っているとしても、ソーシャルワーカーと他の対人援助専門職とでは「何か」が異なるはずである。では、その「何か」とはいったい何であろうか。

この問題を考える際に必要となるのが、「専門性のとらえ方の認識論的転換」(横山 2006: 117)である。近年、Schön (1983) の専門家論⁵⁾に基づき、ソーシャルワーカーが省察的实践家 (reflective practitioner) になることの重要性が指摘されている (横山 2008; 大谷 2012; 空閑 2012)。Schön の考え方に従えば、ソーシャルワークの専門性は「行為の中の知 (knowing in action)」, すなわち、行為の背後にあるソーシャルワーカーのものの見方、考え方にあることから、ソーシャルワーカーが実践のなかで何を感じ、何を考え、どのような判断をくだしているか等を明らかにすることによって、ソーシャルワークの専門性や専門職性を明らかにすることができるのではないかと考えられる。

このような観点から、ソーシャルワークにおいても「援助観」「実践知」「経験知」「暗黙知」などに着目することによって、ソーシャルワークの専門性、専門職性を明らかにしようとする試みが積極的に行われている。たとえば、ソーシャルワーカーの援助観に関する研究は、主に横山や大谷によって取り組まれている。横山は、10年程度以上の経験のあるPSW14名にインタビュー調査を行い、そこで得られた語りをM-GTAによって分析することにより、PSWの経験のプロセスを明らかにしている。その結果、援助観の生成プロセスを「あるべきPSW像への自己一体化」「経験の進化サイクル」「限界から始まる主体的再構成」「互いの当事者性にコミットする」という4つに整理している (横山 2008)。また、大谷もPSWの実践における中核的な要素を明らかにするために、20年以上の経験がある等の条件を満たすPSW13名にインタビュー調査を実施し、得られた語りをKJ法AB型によって分析している。そして、その結果を「PSWのあり方」「当事者との関係性」「PSWの実践」「ソーシャルワーク観」の4つのカテゴリーにまとめている (大谷 2012)。

実践知に関しては、齋藤が、おおむね5年以上の実践経験があるPSW13名を対象としたインタビュー調査を実施し、得られた語りをM-GTAによって分析することによって実践知の形成プロセスを明らかにしている(齋藤 2007)。そして、そこで得られた研究成果の妥当性を検証するため、翌年にはPSW3名を対象としたインタビュー調査を実施している(齋藤 2008)。また、資格取得後おおむね3年以上経過しており、相談援助業務に就いている社会福祉士11名を対象としたインタビュー調査も実施し、M-GTAによって分析することによって、実践知の形成プロセスを明らかにしている(齋藤 2010)。齋藤による一連の研究では、実践の可視化の重要性やそのための教育(卒後教育、現任教育も含む)のあり方の再検討の必要性等、ソーシャルワークの専門性や専門職性に関する重要な指摘がなされている(齋藤 2007; 齋藤 2008; 齋藤 2010)。

先行研究を概観すると、ソーシャルワーカーのものの見方、考え方に関する研究においては、援助観や実践知、暗黙知、経験知など様々な用語が用いられており、その意味するところは少しずつ異なっていると考えられる。ここでは、概念の混乱を避けるため、これらを包含する概念として「実践観」という概念を用いることにしたい。実践観とは、「ソーシャルワークの理論知とソーシャルワークの経験知とが〈私〉というソーシャルワーカーの身の内で結びつけられて形成される援助観(価値—倫理観含む)の総体として行為主体により知的に編まれた概念的構成物」であり(平塚 2011:62)、端的に言えば、実践におけるソーシャルワーカーの思考や判断の総体である。

筆者もこれまでSchön(1983)の専門家論に依拠し、ソーシャルワーカーの援助観を明らかにする研究や(日和 2007)、ソーシャルワーカーの思考に着目することの重要性等についての研究を行ってきた(日和 2012; 日和 2013a)。しかしながら、ソーシャルワーカーの思考に着目することの重要性を指摘するにとどまり、ソーシャルワーカーの具体的なものの見方や考え方を明らかにするには至っていない。そこで、本稿では、ソーシャルワーカーにインタビューを行うことによって、ソーシャルワーカーの実践観を明らかにすることを目的とする。

II. 研究方法

1. 調査対象と調査方法

ソーシャルワーカーの実践観を明らかにするため、ソーシャルワーカー3名を対象としたグループインタビューを実施した。社会福祉士資格を有し、社会福祉施設・機関におけるソーシャルワーカーとしての経験年数が5年以上であるということを経験年数を条件に調査協力者を選定した。調査協力者は、それぞれ、社会福祉協議会、児童発達支援センター、障害福祉サービス事業所の社会福祉士である。調査方法としてグループインタビューを選択した理由は、グループインタビューでは、グループダイナミクスを用いて個別インタビューでは得られない情報把握が可能であるため、普段言語化する機会があまりない自身の実践観を明らかにするには適切であると考えたからである。

インタビューに際しては、事前に調査協力者に質問項目を配布した。質問項目は、①実践において大事にしていること、②①を実現するために工夫していること、③理想のソーシャルワーカーとはどのような人か、④こちらが提示した事例についての意見、の4つである。インタビューに要した時間は約2時間であった。

2. 倫理的配慮

本研究は、日本社会福祉学会研究倫理指針に基づいて行った。調査協力者には、事前に文書ならびに口頭にて研究の趣旨についての十分な説明を行い、同意を得た。また、インタビューの内容に関しては、調査協力者の了解を得てICレコーダーに録音し、逐語録を作成した。個人情報はずべて匿名化するとともに、個人が特定される可能性のある部分は削除するなどの配慮をした。

3. 分析方法

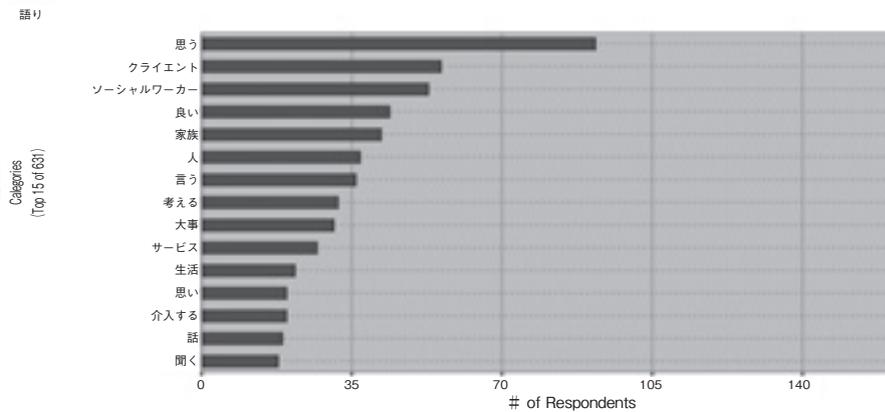
分析はテキストマイニングの手法を用いて行った。テキストマイニングとは、「テキストデータをさまざまな計量的方法によって分析し、形式化されていない膨大なテキストデータという鉱脈のなかから言葉（キーワード）どうしに見られるパターンや規則性を見つけ、役に立ちそうな知識・情報を取り出そうとする手法・技術」であり（藤井 2005：10）、大量のテキストデータを分析するのに優れた方法である。これまでは、主にビジネスやマーケティングなどの領域において用いられてきたが、近年、学術領域にも取り入れられるようになり、ソーシャルワークにおいても用いられる機会が増えている。ソーシャルワークにおいてテキストマイニングを用いている先行研究を概観すると、テキストマイニングには①大量のテキストデータの処理が可能であること、②データの恣意的な解釈を回避できること、③バラバラに見えるデータから共通性を見出すことが可能であること、などのメリットがあることがわかる（日和 2013b）。質的分析においては、信頼性や妥当性の担保が課題になるが、テキストマイニングでは、テキストデータを量的データに変換でき、数量化や視覚化が可能となる。そのため、主観的になりがちなテキストデータの分析をより客観的に行うことができると考えられる。このような理由から、本稿ではテキストマイニングの方法を選定した。テキストマイニングを行うためのソフトウェアには無料のものから高額なものまで様々なものが開発されているが⁶⁾、本稿では、SPSS Text Analytics for Surveysを用いて分析を行った。

分析の手順としては、まず、逐語録を意味のまとまりのある単位に区切り、Microsoft Excelに入力した。次に、そのデータをSPSS Text Analytics for Surveys 4に読み込み、分析を行った。キーワードを抽出し、その後、キーワードを類義語などに基づいて整理するカテゴリ化を行った。また、カテゴリ間の重複を視覚化するためにカテゴリ web グラフを用い、カテゴリ間の関連性を検討した。

Ⅲ. 結 果

グループインタビューの内容をテキストにした結果、総センテンス数は540であった。540のセンテンスに対してSPSS Text Analytics for Surveys 4でキーワードの抽出を行ったところ、1031のキーワードが生成された⁷⁾。次に、これらのキーワードについて、不要な語の削除や類義語の規定などを行った。たとえば、分析上意味をなさないと思われる「ある」や「いる」等のキーワードは削除し、同じ事柄を意味していると考えられる「クライアント」「利用者」「対象者」等のキーワードは「クライアント」のカテゴリに含まれるものとした。その結果、625のカテゴリが生成された⁸⁾。カテゴリは、出現頻度1回のものから92回ものまでバラつきがあった。ここでは、出現頻度15回以上のカテゴリについて分析結果を紹介する。出現頻度15回以上のカテゴリは、23カテゴリあった。そのうち、出現頻度の高かった上位15カテゴリは表のとおりである（表1）。

表1 出現頻度15回以上のカテゴリ



すべてのカテゴリのうち、40回以上出現しているものは、思う(92)、クライアント(56)、ソーシャルワーカー(53)、良い(44)、家族(42)の5つであった。この5つのカテゴリについて、webグラフでカテゴリの重なりを示した。ただし、回答数が多すぎることから、共通する回答数が5以上のカテゴリに絞ってwebグラフ化した。Webグラフでは回答者が多いほどカテゴリを示す丸が大きく表示される。また、線の太さは、共通する回答数を表しており、カテゴリ間の位置や距離には特に意味はない。

最も出現頻度が多かった「思う」カテゴリを見てみると、共通回答5以上のカテゴリは、「クライアント」、「ソーシャルワーカー」、「サービス」、「良い」、「生活」、「話」、「考える」、「理想」、「いろいろ」、「まず」、「人」、の11カテゴリであった。このうち最も結びつきが強かったのは、「ソーシャルワーカー」であった(図1)。

2番目の出現頻度であった「クライアント」は、「思う」、「人」、「説明」、「ソーシャルワーカー」、「サービス」、「家族」、「大事」、「仕事」の8つのカテゴリについて、5回以上の共通回答があった。なかでも「思う」、「サービス」、「家族」との結びつきが強かった(図2)。

3番目の「ソーシャルワーカー」カテゴリは、「大事」、「仕事」、「クライアント」、「人」、「思う」、「良い」、「貫く」、「家族」の8つのカテゴリと5以上の共通回答があった。そのうち、最も結びつきが強かったのは「思う」であり、次いで「大事」であった(図3)。

図1 「思う」カテゴリと共通回答5以上のカテゴリ



図2 「クライアント」カテゴリと共通回答5以上のカテゴリ

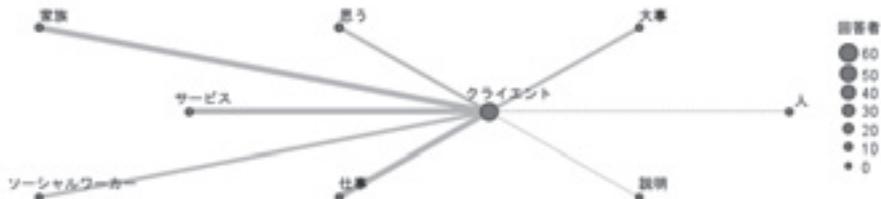
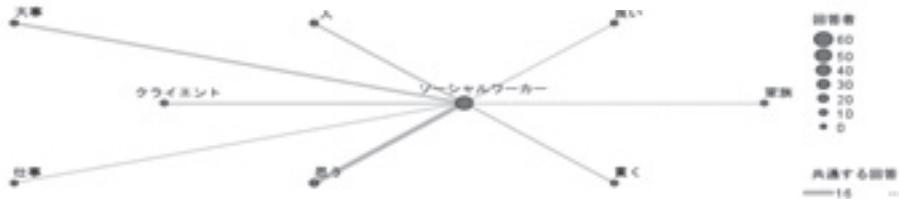


図3 「ソーシャルワーカー」カテゴリと共通回答5以上のカテゴリ



次に4番目の出現頻度であった「良い」カテゴリは、「いかに」、「思う」、「言う」、「人」、「考える」、「生活」、「ソーシャルワーカー」の7つのカテゴリと5回以上の共通回答があった。特に結びつきが強かったのは、「思う」と「考える」であった(図4)。

最後に「家族」カテゴリについてであるが、5回以上の共通回答が得られたのは「ソーシャルワーカー」と「クライアント」の2つのカテゴリのみであり、「ソーシャルワーカー」よりも「クライアント」との結びつきの方が強かった(図5)。

図4 「良い」カテゴリと共通回答5以上のカテゴリ



図5 「家族」カテゴリと共通回答5以上のカテゴリ



IV. 考 察

出現頻度が高かった5つのカテゴリについての分析結果から、ソーシャルワーカーは、クライアントの置かれている状況に対して、①クライアントはどのように思っているのか、②クライアントの家族はどのように思っているのか、③クライアントにとってより良い生活とは何か、④ク

クライアントが活用できるサービスは何か、などを大事にしながら実践していることが推察される。

5つのカテゴリそれぞれの分析結果を詳しく見てみると、ソーシャルワーカーは、クライアントやクライアント家族との関わりにおいて上記の事柄を明らかにしていく際、いくつかの特徴的な視点でもって関わろうとしていることがわかる。

まず、図1の「思う」カテゴリについて見ていきたい。「生活」との関係に関しては、たとえば、「この人自身がどれくらいひとりで生活していける力があるのかな」といったところを、まずは考えるかなと思う」「自宅で生活するにはどうしたらいいかというのをトータルで考えていったらいいのではないかと思う」といった発言があった。このことから、ソーシャルワーカーは、クライアントにとってどのような「生活」を送ることが最善なのかを考えるとともに、クライアントが望む生活を実現するためには、クライアントのコンピテンスを把握することが必要であると考えていることがわかる。また、共通回答が5回とそれほど数が多いわけではないが、「いろいろ」との関連が強いことも注目し値すると考えられる。たとえば、「基礎知識がないといろいろな情報提供ができない」「いろいろな自分もっている人脈とか、いろいろな自分の引き出しをフルに使って」などの発言があるが、このことから、ソーシャルワーカーは決してひとつの考えやひとつの選択肢ではなく、より多くの考えを把握したり、より多くの選択肢を提示したりすることを大事にしているのではないかと推測できる。同じく共通回答が5回と回答数は少ないものの、「まず」との関連が強いこともソーシャルワーカーの実践観の特徴をあらわしているのではないかと考えられる。たとえば、「本人が今後どうしていきたいのか、というところを含めて、まずはそこを考える」「まずは、相手に何を押し付けるわけでもなく」などの発言から、ソーシャルワーカーはクライアントとの関わりにおいて、ソーシャルワーカーとしてまず何をすべきなのか、優先すべき事柄は何か等、時間の概念を意識しているのではないかと考えられる。

次に、図2の「クライアント」カテゴリについてである。「クライアント」は「サービス」との結びつきが強いが、たとえば、「クライアントがどういったサービスが必要かといったところをある程度分かってくたら、一緒に実際に手続きであるとかいったところも、クライアントが分からないようであれば入っていったり」「クライアントにショートステイとかの説明をして、こんなことしてるんだよ、とって見せたり」といった発言があった。これらの発言から、ソーシャルワーカーは単にサービスの説明をしたり、短絡的にサービスに結びつけたりするのではなく、クライアントがサービス利用をイメージすることができるように説明の仕方を工夫したり、サービスを利用するための手続きをクライアントの力で行えるよう働きかけをするなど、クライアントのコンピテンス強化の視点を大事にしているのではないかと考えられる。このことは、「説明」との関連からも読み取ることができる。

図3の「ソーシャルワーカー」カテゴリは、「思う」との結びつきが最も強いが、ここからは、ソーシャルワーカーが相手への伝え方や交渉の仕方などを大事にしていることがわかる。また、問題を解決するのはあくまでもクライアントであり、ソーシャルワーカーはクライアントが自身の問題を解決できるように促す側面的援助者であること、クライアントのストレングスに焦点をあて、クライアントの潜在能力を引き出すこと、クライアントの成長を信じることなどに価値をおくソーシャルワーカー像を持っているのではないかと推察される。このような実践観は、たとえば、「伝える力、コミュニケーション力というか、そういったのを持っているワーカーはいいなと、そういう人を見て思います」「自己決定をしていくための、そこにいくまでの手助けをしていくのが私たちの仕事だと思う」「その利用者さん自身が自分の持っている力をうまく発揮しながら、うまく環境のなかでうまく折り合いをつけながらやっていくためのきっかけを提供する

というような人がやっぱりソーシャルワーカーかなと思います」などの発言にみることができた。さらに、「ソーシャルワーカー」と「貫く」との関連から、ソーシャルワーカーはクライアントのより良い生活を実現するために、ソーシャルワーカーとして譲れない部分とはことん貫こうとする姿勢を有しているのではないかと考えられる。そのためにも、前述した相手への伝え方や交渉の仕方は重要になるのではないだろうか。

図4の「良い」カテゴリは「考える」や「思う」との結びつきが強い。たとえば、「何か困ったときに、じゃあこうこうしたらいいのかわからないけど、一緒に考えていこう」「最終的には、利用者がどうあったら一番いいのかということになると思います」「施設ではなくて、サービスを受けながら地域で生活できるすべを考えるといいのかなと思っています」などの発言があった。これらのことから、ソーシャルワーカーは、クライアントにとっての最善の利益とは何かを考え、クライアントに寄り添い、クライアントと共に考える姿勢を大事にしていることや、クライアントが地域でその人らしく生活し続けることに価値を置いていることなどが推察される。また、「いかに」との関連が強いことから、ソーシャルワーカーがクライアントのより良い生活を実現するために、どのような方法で説明すべきなのか、クライアントやクライアント家族とどのような関わりを持っていくべきなのかを常に考えていることがわかる。

最後に図5の「家族」カテゴリであるが、共通回答5以上のカテゴリは「ソーシャルワーカー」「クライアント」だけであった。たとえば、「関係性、親と子の関係性の部分もあるのかもしれないですけど、まあ、そういった親と子の関係性が良くても子どもには何か本当のことを言い出せない、迷惑をかけられないという気持ちとかもあって」「親御さんと先生をつないでから、あの、説明をしていったり」などの発言があったが、ここからもソーシャルワーカーの実践観を垣間見ることができる。まず、ソーシャルワーカーはクライアントだけでなく、家族も援助対象として捉えていることである。これは、言い換えれば、クライアントをクライアントシステムとして捉えているということでもある。また、クライアントシステム内はもちろん、クライアントシステムとその他のシステムとの関係性に焦点を当てていることもわかる。社会関係に着目することによって、ソーシャルワーカーとしてどの部分に介入すべきか、ということが明確になる。このような視点を大事にしているからこそ、ソーシャルワーカーはより良い社会関係を構築するための橋渡しの役割を果たしているのではないかと考えられる。

以上のことから、ソーシャルワーカーは、クライアントをシステムとして捉え、社会関係に焦点を当て、常に、クライアントにとっての最善の利益を考えながら、ソーシャルワーカーとして何をなすべきかを判断していることがわかる。その際、最も大事にしているのは、クライアントが抱えている問題をクライアントが自身の問題として受けとめ、自分の力で解決していくことができるよう、クライアントのコンピテンスの強化を図ることである。そのために、クライアントが自身の力で選択することができるような環境調整や、介入のタイミング、伝え方や交渉の仕方などを工夫しているのではないかと考えられる。

V. おわりに

本稿では、テキストマイニングを用いてソーシャルワーカーの語りからソーシャルワーカーの実践観を明らかにすることを目的としていたが、出現頻度の高いカテゴリと結びつきの強いカテゴリとの関連性を考察することによって、いくつかのソーシャルワーカーの実践観の特徴を導き出すことができた。このことから、多少なりともテキストマイニングを活用することの有用性が確認できたと考える。しかし、テキストマイニングには、出現頻度の高いカテゴリだけが分析の

対象となるという課題もある。ソーシャルワーカーの実践観について考察する場合、たとえ出現頻度が低くてもソーシャルワーカーとして重要なものの方や考え方があは容易に想像がつく。実際、今回の分析作業を進めるなかでも、出現頻度の低いカテゴリのなかにもソーシャルワークの専門性を考える上では重要であると考えられるカテゴリがいくつもあつた。これらのカテゴリを出現頻度が低いとの理由で切り捨てることは簡単だが、類義語等の整理を行うカテゴリ化次第では分析対象となることもある。テキストマイニングを行ううえでは、カテゴリ化の作業が分析結果を左右する重要なプロセスであることを改めて感じた。また、出現頻度の低いカテゴリについては、質的分析を行うことで新たな意味づけができることが考えられる。よって、今後は、テキストマイニングだけではなく、KJ法やグラウンデッド・セオリーなどの質的分析も合わせて行うことによって、より多角的にソーシャルワーカーの実践観を検討していきたい。

文 献

- 秋山智久 (1971) 「専門職性の研究—専門職をめぐる諸概念と成立の条件」『四国学院大学論集』22, 20-37.
- 秋山智久 (2007) 『社会福祉専門職の研究』ミネルヴァ書房.
- Carr-Saunders, A. M. and Wilson, P. A. (1931) *The Profession*, Frank Cass & Co.
- Etzioni, A. ed. (1969) *The Semi Profession and their organization*, The Free Press.
- Flexner, A. (1915) Is Social Work a Profession?, *Proceedings of the National Conference of Charities and Correction: at the 42 annual sessions*, 576-590.
- 藤井美和・小林考司・李政元 (2005) 『福祉・心理・看護のテキストマイニング入門』中央法規.
- Greenwood, E. (1957) Attributes of a Profession, *Social Work*, 2 (3), 45-55 (=1978, 小松源助監訳「専門職の属性」『現代アメリカの社会福祉論』ミネルヴァ書房, 335-350.)
- 平塚良子 (2011) 「ソーシャルワークの実践観」『ソーシャルワーク研究』36 (4), 60-67.
- 日和恭世 (2007) 「死にゆく人びとへのソーシャルワーカーの援助観に関する一考察」大分大学大学院福祉社会科学部研究科修士論文.
- 日和恭世 (2012) 「ソーシャルワーカーの援助観の検討—ソーシャルワークが専門職の実践であるために」『九州社会福祉学』8, 25-36.
- 日和恭世 (2013a) 「ソーシャルワーカーの思考に焦点を当てる意味—反省的実践家の視点から」『別府大学紀要』54, 102-114.
- 日和恭世 (2013b) 「ソーシャルワーク研究におけるテキストデータ分析に関する一考察」『評論・社会科学』106, 141-155.
- 葛西久志 (2010) 「精神保健福祉士の専門職論—精神保健福祉士の専門職性の要件の具備的状況」『弘前学院大学社会福祉学部研究紀要』10, 11-23.
- 空閑浩人 (2012) 『ソーシャルワーカー論—「かわり続ける専門職」のアイデンティティ』ミネルヴァ書房.
- 南彩子・武田加代子 (2000) 「医療ソーシャルワーカーの職務の特徴—アイデンティティと実践的意識の比較」『社会福祉学』41 (1), 111-120.
- 南彩子 (2001) 「ソーシャルワーカーの専門職性を求めて—米国における専門職業化の流れに関する文献レビュー」『天理大学社会福祉学研究室紀要』(3), 41-49.
- 南彩子・武田加代子 (2004) 『ソーシャルワークの専門職性自己評価』相川書房.
- 南彩子 (2006) 「学習・体験・対象者観がソーシャルワーク専門職性形成に及ぼす影響—共分散

- 構造分析の手法を用いて」『天理大学社会福祉学研究室紀要』(8), 5-18.
- 日本社会福祉実践理論学会ソーシャルワーク研究会 (1998)「ソーシャルワークのあり方に関する調査研究」『社会福祉実践理論研究』7, 69-90.
- 奥田いさよ (1988)「ソーシャルワークの職務分析に関する試論」『社会福祉学』29 (1), 65-93.
- 奥田いさよ (1989)「医療ソーシャルワーカーの機能と業務に関する一考察」『医療と福祉』23 (1), 79-84.
- 奥田いさよ (1992)『社会福祉専門職性の研究』川島書店.
- 大谷京子 (2012)『ソーシャルワーク関係—ソーシャルワーカーと精神障害当事者』相川書房.
- 齋藤征人 (2007)「精神保健福祉実践者の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」『社会福祉士』14, 109-116.
- 齋藤征人 (2008)「精神保健福祉実践者の『実践知』形成過程に関する実証研究」『帯広大谷短期大学紀要』45, 1-10.
- 齋藤征人 (2010)「社会福祉士の『実践知』形成過程に関する仮説的研究」『帯広大谷短期大学紀要』47, 31-44.
- Schön, Donald A (1983) *The Reflective Practitioner: How professional Think in Action*, Basic Books. (=2001, 佐藤学・秋田喜代美訳『専門家の知恵—反省的实践家は行為しながら考える』ゆみる出版, =2007, 柳沢昌一・三輪健二監訳『省察的实践とは何か—プロフェッショナルの行為と思考』鳳書房.)
- 武田加代子・南彩子 (2002)「ソーシャルワークの専門職性評価指標作成の試み」『社会福祉学』42 (2), 32-42.
- 田中希世子 (2005)「ソーシャルワークにおける職務研究—先行研究からの検討」『同志社社会福祉学』19, 104-124.
- 山辺朗子 (2007)「ソーシャルワーカーの専門職性についての意識に関する調査報告」『龍谷大学社会学部紀要』31, 62-70.
- 横山登志子 (2006)「地域生活支援をめぐる精神科ソーシャルワーカーの本質的使命—2つのジレンマを手がかりとして」『社会福祉学』46 (3), 109-121.
- 横山登志子 (2008)『ソーシャルワーク感覚』弘文堂.

注

- 1) ソーシャルワークにおける専門職の属性に関する研究としては、Flexner や Greenwood の研究が有名であり、これらは「属性モデル」と呼ばれる。1915年、Flexner は「ソーシャルワークは専門職か (“Is Social Work a Profession?”)」と題する講演において、ソーシャルワークと医師をモデルとした専門職の属性とを照らし合わせ、「ソーシャルワークは未だ専門職に到達していない」と結論づけた (Flexner 1915)。また、Greenwood は1957年に「専門職の属性 (“Attributes of a Profession”)」を發表し、①体系的な理論、②専門職的権威、③社会的承認、④倫理綱領、⑤専門職的副次文化の5つを専門職の属性としたうえで、「ソーシャルワークはすでに専門職である」と主張した (Greenwood 1957)。
- 2) 専門職としての成熟度の観点から専門職性を明らかにするアプローチは、「プロセスモデル」と呼ばれる。例えば、Carr-Saunders と Wilson は、専門職は初めから専門職であるわけではなく、未熟な段階から発展していくものであると捉え、専門職を可能的専門職 (the

- would-be professions)、準専門職 (the semi-professions)、新専門職 (the new professions)、完成専門職 (the established professions) という4つの段階に整理している (Carr-Saunders & Wilson 1931)。また、EtzioniはCarr-Saundersらによって提示された準専門職 (the semi-professions) の概念を明確化し、準専門職を代表する専門職として教師、看護師、ソーシャルワーカーを挙げている (Etzioni 1964)。
- 3) 専門性とは「専門職性の基礎となる、抽象度が高い『学問・研究のレベル』の課題を持つ項目」であり、専門職性とは「『職業のレベル』の課題を持ち、社会における『職業としての社会福祉』としての要点となる項目」であるとされる。また、専門職制度とは「専門職がさらに社会で機能するために必要な『制度・システムのレベル』の課題を持つ。」ものであるとされる (秋山 2007: 114-116)。
 - 4) 職務分析 (job analysis) とは、職務を科学的に把握する方法であり、1923年にアメリカ合衆国連邦政府が用いたことにより普及した。ソーシャルワークに職務分析を導入することによって、①ソーシャルワークの職務の確定、②業務内容および遂行水準の標準化、③他職種と比較しての業務内容の独自性の明示、④業務遂行実態の把握、⑤活動領域ごとの業務の特徴の明確化、⑥援助活動における技法の選択、などの効用が期待できるとされる。また、評価や効果測定や教育等にも活用できるという (奥田 1988)。
 - 5) 近代において、専門家の活動は「科学的な理論や技術を厳密に適用する道具的な問題解決にある」とする「技術的合理性 (technical rationality)」モデルで捉えられ (Schön=2001: 19)、そのような専門家は「技術的熟達者 (technical expert)」と呼ばれる。しかし、実際の状況は理論や技術を適用すれば解決できるような単純なものではなく、複雑で不安定で不確実なものであることから (Schön=2001: 56-61)、Schönは、専門家が行為しながら考える「省察的実践家 (reflective practitioner)」になることの必要性を指摘している。
 - 6) テキストマイニング専用のソフトには、「Word Miner」や「SPSS Text Analytics for Surveys」といった高額なものや、無料でダウンロードできる「茶釜」や「KH Coder」などがある。
 - 7) SPSS Text Analytics for Surveysでは、「キーワード抽出」は一次分析、「感性分析」と「係り受け解析」は二次分析と呼ばれる。一次分析においては、テキストデータを、意味をもつ最小の言語単位である形態素に分ける「形態素解析」が行われる。この分析によって抽出された語彙をキーワードまたはコンセプトと呼ぶ。キーワード (コンセプト) には、単語だけでなく、複合語も含まれる (内田ら 2012: 26-32)。
 - 8) SPSS Text Analytics for Surveysでは、キーワードのまとまりをカテゴリと呼び、不要語や類義語の整理等の作業を通してカテゴリを作成することをカテゴリ化と言う。